

令和8年  
2026年

# 3月

日	月	火	水	木	金	土
1 先勝 いぬ	2 友引 三りんぼう	3 先負 ひなまつり	4 仏滅 一粒万倍日	5 大安 啓蟄 一粒万倍日 三りんぼう とら	6 赤口 う	7 先勝 たつ
8 友引 み	9 先負 うま	10 仏滅 ひつじ	11 大安 さる	12 赤口 とり	13 先勝 いぬ	14 友引 る
15 先負 ね	16 仏滅 うし	17 大安 彼岸入り 一粒万倍日 三りんぼう とら	18 赤口 う	19 友引 たつ	20 先負 春分の日 春分	21 仏滅 うま
22 大安 ひつじ	23 赤口 彼岸明け	24 先勝 一粒万倍日	25 友引 社日	26 先負 る	27 仏滅 ね	28 大安 うし
29 赤口 一粒万倍日 三りんぼう	30 先勝 う	31 友引 たつ				

# 弥生

〔やよい〕令和8年3月  
弥は「いよいよ」「ますます」という意味で、「たくさん植物が生まれて花盛りになる」という意味があります。  
発行：北海道神社庁一區教化委員会

世に痴者二つあり。その一は神を祈らざる人なり。  
その一は事を行はざる人なり

―鈴木重胤・延喜式祝詞講義―

## 今月のことば

世に痴者二つあり。その一は神を祈らざる人なり。その一は事を行はざる人なり

痴者（しれもの）とは愚者（おろかももの）のことである。愚者とはすべてに怠りのあるものことである。怠りとは勤め励まないものことである。

神の有り難きを知る知らぬに限らず、神あつての自己であることを知れば、神に祈り、感謝の心を捧ぐべきである。それをしないものが一番の愚者だといふのである。

第二の愚者とは、なすべき義務について、これを知つて実行しないものことである。「事は行はざる」とは、唯の仕事だけではない。これを完全に徹底的にやり通さないことである。

よい加減な事をして、それでよしとしてゐるものは、結局、よい加減の人間になる以外にない。

（神道百言一般財団法人神道文化会編より抜）

## 季節のまつり

上巳 三月三日  
桃の節供「ひな祭り」

上巳の節供、一般的には「桃の節供」として親しまれているひな祭りですが、もともとは田植への前田の神様を迎えるために、紙や土で小さな人の形を作り、体をなでてけがれを落とし、川や海に流す祓の行事であったようである。その人形が次第に豪華になり現在のようになつたといわれるようになった。この日、女兒の成長を祝い喜び、未長い幸福を祈ります。ところで、俗に雛人形はあまり長く飾ると女の子の婚期が遅れると考えられ、ひな祭りが過ぎた翌日以降、なるべく早く片付けなければならないといわれています。

## 春分

三月二十日  
「我が家の守り神」に感謝の祭り

この日を中日に前後三日の間をお彼岸と呼びます。ふだんは忙しくてなかなか行けないお墓にも、家族そろってお参りしご先祖のお祭りをしますが、これはわが国の伝統的な祖先を敬い大切にすの信仰に由来しています。

## 社日

三月二十五日  
「戌の日」に豊作祈願

社日は、産土神（生まれた土地の守護神）を祀る日で、春分・秋分の日に最も近い戌の日をいいます。「戌」という文字には「土」という意味があります。この日、土地の神を祀って春は五穀の豊作を祈願し、秋には実りの収穫に感謝します。

## 二十四節気

【啓蟄 けいちつ】…五日  
旧暦二月卯の月の正節で、このころになると、冬眠していた地中の虫も、そろそろ穴を啓（ひら）いては出し出します。

【春分 しゅんぶん】…二十日  
旧暦二月卯の月の中気で、この日を春の彼岸の中日といい、国民の祝日になっています。太陽の中心が春分点に達し、太陽黄経零度になり、昼と夜の長さがほぼ等しくなり、この日を境に昼が徐々に長くなり、夜が短くなっていきます。

## 六曜・選日

【先勝】…諸事急ぐことによし、午後よりわるし  
【友引】…朝夕よし、正午わるし、葬式を忌む  
【先負】…諸事静かなることによし、午後大吉  
【仏滅】…万事凶、愚えは長びくおそれあり  
【大安】…何事をするのにも吉の日、大吉日  
【赤口】…諸事油断すべからず、正午のみ吉  
【選日の吉凶】  
【三りんぼう】…三隣亡日、普請始め、棟上大吉日  
【一粒万倍日】…出資・投資・購入、新規事業開始  
婚姻は吉、借る、離別は凶

## 七十二候《3月》

初候・蟄虫啓戸（ちうちゅうこをひらく）  
次候・桃始笑（ももははじめてわらう）  
末候・菜虫化蝶（なむしちようとなる）  
青虫が羽化して紋白蝶になる

初候・雀始巢（すずめはじめてのうら）  
次候・桜始開（さくらのはじめてひらく）  
末候・雷乃發声（かみなりこえをはつす）  
春の雷が鳴り始める

※七十二候とは二十四節気の各節気をさらに三つに分けて七十二に分けたものをいいます。季節の移ろいを気象や動植物の成長・行動などに託して表現したものです。

## 春彼岸について

わが国に、一年中で祖霊を祭る共通の大きな機会が四回ある。正月、春彼岸、盆、秋彼岸がこれである。このうち彼岸は春分と秋分の前後三日ずつ、計七日間を指して言う言葉で、暦日としては陰暦によっている。彼岸の文字は仏語から出ていて祖霊を祭ることは、やはりわが国の固有信仰の習俗から出てきているといえる。これを、言葉が外来語で、行事の形式も仏の供養に似ているから仏教独特のものかと思われがちではないかと思われる。これは仏教が伝来してから民間に普及するまでの長い間に、わが国の祖霊祭祀の習俗を多く採り入れたためであって、元来は祖霊祭祀という日本民族の固有信仰によるものであった。

彼岸が祖先を大切に考えての祭りであることは、物故した祖霊にばかりではなく、生きていた祖先たる親に対して行われることでも分かる。愛媛県の一部に「彼岸養い」といって、親に供養することが行われている。このように子が親に対して供養して孝養をつくすことや、嫁が御馳走をつくらせて里親の許に持参する例も多い。これはまさに、盆の生御霊（いきみたま）供養といわれることを全く同じである。

彼岸行事は、子孫たるわれわれが今生きていることは両親あつてのことであり、さらに祖先あつてのことであることを忘れぬ限り続けられて行くであろう。祖霊祭なくして彼岸は成り立たない。祖霊に報恩の誠心を捧げつつ、生きるための営みを、わが民族は悠遠の昔から続けて来たのである。

はうかいしん  
上下一心  
身分や地位を問わず、心を一つにして事にあたること。



菜の花

参考文献  
『くらしと祭り百話』小野迪夫（神社新報社）

## 「君が代」に込められた先人の願い

君が代は 千代に八千代に  
さざれる石の 巖となりて  
苔のむすまで

国歌「君が代」は、『古今和歌集』の賀歌の中で一番にある歌が、初出だといわれています。平安時代に歌われていた「君が代」は、鎌倉時代以降になって神事や宴席の最後に歌われる祝歌として一般に広がり、江戸時代に至ると物語、伽椰子などの文芸、浄瑠璃、謡曲などに芸術にも登場するようになっています。「君が代」は朝廷から武士、農民、町人を問わず、また江戸、京都などの都市から南海の離島に至るまで歌われました。千年以上も人々に親しまれ、祝賀の歌として使われてきました。明治の時代となり国歌の制定に際して、「君が代」が選定されたのは当然のことでした。日本の伝統として「君」と「国民」は分け隔てなく、「皇位の隆昌」はすなわち「国の繁栄」であり、かつ「国民の幸福」であるといふことが「君が代」の歌に込められているのです。それは、日本国民共通の願いの表現でした。

この国民共通の願いは、日本国憲法第一条に「日本国と日本国民統合の象徴」として天皇が定められているのです。

安産祈願 3月の戌の日  
1日(月)  
13日(金)  
25日(水)

## 《20日 春分の日》

自然をたたえ生き物をいつくしむ日です。

祝祭日には国旗を掲げましょう